

福井市出身のデザインディレクターで大阪大大学院教授の川崎和男氏がこのほど、同市で開かれた真経産品協議会の創立十周年記念式典で講演し、「経営もデザインも同じ。不況脱出には企業の価値設計、デザインが必要」と県内の経営者らにアドバイスした。昨年は川崎氏がデザインした眼鏡が米共和党の副大統領候補だったペリン氏に愛用されていたことも注目を集めた川崎氏に、福井の経済やまちづくりに対する考え、自身のこれからの仕事などについて聞いた。

デザインディレクター・大阪大大学院教授
川崎 和男さん(福井市出身)に聞く

「企業経営もデザインは同じだ」と発言されているが、デザインとは何か。
「日本では、デザインという言葉がファッションから入ってきた。装飾、モノの形を作る仕事と考えられているが、そうではない。デザインは思想の表現だ。例えば会社のシンボルマークは、マークの形を作っただけではデザインではない。会社の使命感がマークの形に表れていなければいけない」

「増永眼鏡(福井市)は、会社をどうデザインするかというところに僕を使っている。商品にも会社のデザインが端的に表れている。それがなければ、いくら商品を作っても意味がない。日本のある大手メーカーの商品が人気がなくなくなったのは、形だけで会社のデザインが欠落してきたからだ」

「福井の活性化に何が必要か」
「JR福井駅の再開発をみて、古里の駅がこんなになるのかとあきれかえった。人口八十万人の小さな街をしっかりと

厳しい環境 積極果敢に 取り入れる考え方を



不況に立ち向かう県内企業へ

「企業は厳しい環境を積極果敢に取り入れる考え方を」と呼び掛ける川崎和男氏(福井市のユアーズホテルフカイ)

「金沢は再開発計画で真ん中に金沢21世紀美術館を建てた。今では一年間に百七十万人が訪れている。ルーブル美術館の来館者が年間四百万人だから、ルーブルの半分近くが訪れた計算になる。(21世紀美術館の来館者が)金沢で買い物して帰るから経済効果が上がっている。仙台にも(中心部に文化複合施設の)せんだいメディアテークがあるが、いま福井に欠けている福井のまちづくり文化施設が必要なのはそういうものだ」
「県内企業は、今の不況にどう立ち向かえばよいか。」「厳しい時代だからこそ、福井の産業がなぜ興ったかを考えるべきだ。雪の多い福井では繊維産業だけでやっていけないから眼鏡が生まれた。厳しい環境の中で福井の産業は育ってきた。厳しい環境を積極果敢に取り入れる考え方をしたい」
「例えばこれからの眼鏡は、眼鏡の開発は終わっているので、今年発表する予定だ。眼鏡産業は、もう一段上のステップに上がらなければいけない」
「大学院で取り組んでいることは、今後の研究テーマは。」「大阪大大学院コミュニケーションデザイン・センターでは、コミュニケーションのデザインがどうあるべきかを研究している。医者と患者の間でどういうデザインが必要か。手術中の環境が患者にとって本当によいものか、手術のシステム、制度、手法などを設計し直している」
「日本に対するイメージが悪くなっている。イメージを上げる役割を果たさなければならぬ」と思っている。阪大や京大で裏付けのテストしてもらえるので、原子力エンジンやバッテリーの設計をしている。また、ワクチン用の注射器の開発にも取り組んでいる」
「福井とどうかかわっていくのか。」「十年かかったがタケフナイフビレッジという打刃物の産地ができた。これからは、お年寄りになった職人を作家にしたいと思う。ぜひ人間国宝になってほしい。越前打刃物美術工芸協会の協力を得たい」
「県内企業からの要請があれば、必ず福井に帰ってくる。僕の研究室にもぜひ来てほしい。県内企業のためなら、何をさせておいても協力したい」

これからの眼鏡界
もう一段上目指せ